

「白、やがて黒へ」

作 F O ペレイラ 宏一朗

登場人物

- 女1 大島宙美（おおしまそらみ） 長女 三十二歳
女2 大島真宙（おおしままひろ） 次女 二十九歳
女3 大島花子（おおしまはなこ） 三女 十九歳
男 金成聖次（かねなりせいじ） 管理人 三十五歳

舞台は小さなマンションの一室。三姉妹はそこで演劇をしている。

始まりは何もない空間。真つ白な何もない空間。

音楽が鳴る。

三姉妹たちが舞台のセットを持ちながら舞台に現れる。それぞれ白い服を着ている。徐々に舞台は作られていく。

女1 果てしなく長い長い時間、女つてのはいつも愛を待ち望んでいる。待ち望んでいるの。まるで夜空に輝く星のように、いつか誰かが上を向いて見つけてくれるそのときみたいに。そして私たちはそのときの瞬間に今までで一番の輝きをかけるの。素敵でしょう。ここは宇宙の果ての果ての果て。つまりどこでもない場所。ここでは限りなく無限に近い時間が流れているわ。まるで夢、夢を見ているみたいなの、そんな時間。私たちはその夢の時間の中で、現実という夢を見ている。何にも染まらない色で、いえ色ですらない存在として、ここで愛を待っている。私たちはキャンバスだわ。ただひたすら、部屋の隅で待つキャンバスに似ているの。でも、誰も絵具を持っていないから、私たちは無限に、無限にここで生きている。今日も明日も、いいえ、そんな時間の概念なんてない空間で、ただひたすらに、私たちは待っているの。

暗転。

明かりがつく。

マンションの一室。上手側は玄関。

舞台上真ん中奥にイーゼルにかかった白いキャンバス。

舞台上上手に机と三つの椅子。

舞台上下手にキッチン。

夜中。

女1 ねえ、白雪姫についてどう思う？

女1 は台本を書きながらポツポツと呟く。

女2 どう思うって？

女2はカップブライメンをすすっている。

女1 あれって、結局幸せだと思える？

女2 ハッピーエンドでしょ？そりゃあ幸せなんじゃないの。

女1 なんでハッピーエンドって思うの？

女2 だって最後に「めでたしめでたし」って書いてあったし。

女1 それでハッピーなの？じゃああんた自分の人生に「めでたしめでたし」って書いてあったらオールオッケー？

女2 いやそれは違うでしょ。私の人生なんだし。

女1 どう違うの？じゃあ白雪姫の人生は？なんか勝手にブスの年増から妬まれて毒殺されかけた挙句馬に乗った勘違い男にファーストキス奪われて結婚だけ？

女2 ウゲ、やだ。グレそう。

女1 そうなのよ。グレルよねそんな人生。いろいろとおかしいのよ。

女2 でも童話でしょ。

女1 童話ってやつは普及の名作とか言われてるけど、やっぱり全然現代的じゃないのよね。

女2 現代的だったら絶対名作にならないよ。

女1 そんなことないわよ。チェーホフを見習いなさい。現代的なのにいつまでも残っているでしょが。

女2 私が見習っても意味ないでしょうが。

女1 現代的現代的現代的。やっぱり女の悲劇を描くには現代的な作風じゃないとダメなのね。まあある意味では白雪姫も悲劇だけど、でもあれって完全に女の幸せをはき違えていると思うのよね。絶対女性自身の編集者みたいなやつが書いたのよ。

女2 知らないけど。

女1 花子はどう思うの。

女3 読んだことないからわかんない。

女3は携帯ゲーム機でモンスターを殺しまくっている。巧い。

女1 だって王子様のキャラ設定だってきちんと見えてないし。話の中でわかるのは王子様イコールお金持ちってだけって、金持ちと結婚することが女の幸せなのかっての。

女2 でも死にかけてる白雪姫を救ったんでしょ。いい人じゃん。

女1 世界で一番美しい女がそこに転がってんのよ。そりゃあキスするわよ。偽善とかじゃないわよ。リビドーよりリビドー。

女2 お姉ちゃんって捻くれてるよね。

女1 うるさい。

女2 劇団員の人ってそれに関して何も言わないの？

女1 何がー？

女2 お姉ちゃんのそういうところ。完全に女尊男卑なところ。

女1、作業している手を止める。

女1 私は別に女尊男卑じゃないわよ。どちらの立場も平等だと思ってるの。

女2 そういいう言い草は大体女尊男卑だってバイト先の人が言ってたけど。

女1 誰よそいつ。

女2 その人のことは別にいいじゃん。

女1 なんでよ。

女2 そういう細かいこと気にしてるから婚期逃すんだよ。

女1 私は演劇があるから結婚してないだけです。

女2 見栄張っちゃって。

女1 あんただってもう三十でしょうが。

女2 ブーメランです。

女2、ケラケラと笑っている。

女1 ……で、誰なのよ。女尊男卑って言ったの。

女2 三十五歳男性。

女1 ……三十五にもなってバイトの男が偉そうに言ってんじゃないわよ。

女1、再び作業に戻る。

女2 まあ、その人は社員なんだけど。

間。

女1 あんたそれ何個目？

女2 三回目？

女1 何個食べれば気が済むのよ。

女2 なんかお腹すくんだよね。

女1 太るよ。

女2 それは困るデブー。

女1 なってからじゃ遅いんだからね。

女2 ちよつと気を付けようとは思うんだけど、なんかつい進んじゃうっていうか。

女1 松村邦彦がテレビで同じようなこと言ってたよ。

女2 ウゲ、ああんりたくはないね。

女1 だったらせめて一個にしときな。ただでさえ夜食って太るんだから。

女2 まあまあ。お酒飲めないんだし許してよ。

女1 どっちにしろ体に悪いんだから。気を付けないとお父さんみたいに早死にするんだから。

女3 (ゲームに向かって) くそ、こら、死ね、

女2 気を付けます。

女2、カップラーメンを完食する。

女2 ごちそうさまでーす。

女2、キッチンの流しにカップラーメンの残り汁を若干飲みつつ捨てに行く。捨て終わるとそのまま歯磨きを始める。

女1 花子、あんた明日学校何時？

女3 わかんない。

女1 わかんないってことはないでしょうに。

女3 えー、あー、多分十時ぐらい。

女1 ぐらいって何よ。

女3 ぐらいはぐらい。

女1 十時ぐらいじゃわかんないでしょ。夜か昼かも。

女3 じゃあ夜ー。

女1 鬼太郎か。

女1、作業を止めて女3のゲームを取り上げる。

女3 あ、ちよつと返してよ。

女1 十時なんだったら八時には起きるんでしょ？もう寝ないでだめじゃない。これは没収します。

女3 あー、ちが、十時に起きたら間に合うの。

女1 また嘘言つて。

女3 ホントだってば、

女1 あんたそう言つて前期単位落としたじゃない出席足りなくて。あんたがこっちの美大にどうしても通いたいって言うから一緒に住ませてるのに。いいかげんにしないとお母さんに言いつけるよ。もしくは本当に墓場で運動会するかい？

女3 うぎや、ちよつとそれはマジでダメだって。

女1 だったら言うこと聞いてさっさと寝なさいよ。

女3 はーい。

女3、しぶしぶ従う。

女1は作業に戻る。

女2 その会話耳にタコができるほど聞いたわ。

女1 私だつて口にタコができるほど言ってるわよ。

間。

女3、歯を磨こうとする。

女3 あ、ちよつとお姉ちゃん、

女1 どっちの？

女3 真宙姉ちゃん、また私の歯磨き粉使ったでしょ。

女2 いいじゃん別に。減るもんじゃないんだし。

女3 減るもんだよ具体的に！今日は薬局で買ってくるって言つてたじゃん！

女2 だって今日は買いに行く気にならなかったんだよね。

女3 それもう二週間は言ってるよ！

女2 まだ十三日目だよ。

女3 一緒じゃん！

女2 女にとつての一日の重要さがわからないとはあんたまだまだケツが、

女3 ケツが青かろうが赤かろうがなんでもいいけど、いいかげん自分の買ってよ！ねえ宙美姉ちゃんからもなんか言ってるよ！

女1 花子うるさいよ。

女3 また私ばかり怒られるんだ。

女1 真宙も悪いと思うけど、夜中にそんなに大きな声出すんじゃないの。女のヒステリーって三軒隣まで聞こえるって言うんだからね。

女2 マジ？

女1 マジマジ。

女2 (笑) うっそお。

女3 何も面白くない！！

隣の部屋の住人から壁を殴られる。

「ドンドン！」

一瞬の間。

女2 あ、ホントみたいね。

女3 〜〜〜〜〜〜っ！！

女3、足音を「ドス、ドス、」とたてながら消える。

女1 どこ行くの？

女3 トイレ。

女1 やれやれ。何をカリカリしてるのか。

女2 怒られたから八つ当たりしてるんですよ。ガキガキ。

女1 あんたもいい加減歯磨き粉買いなさいよ。

女2 わかってるわかってる。明日ね。

女1、パソコンに今の一連のやりとりを打ち込んでいる。

女1 「明日ね。」と。

少しの間。

女1 シンデレラもさ、思い出してみれば決してハッピーとは言えないわよね。

女2 へ？

女1 シンデレラ。

女2 あれはハッピーなんじゃないの？虐められてた家から玉の輿でしょ？

女1 でもそれにより唯一だった肉親は処刑されるし、労働という生きる価値を奪われ、城の中で退

屈に王子の相手をさせられ続けるのよ？

女2 お姉ちゃんってやっぱり歪んでるよね。

女1 そう？

女2 ねえ。さつきからなんでそんなことばかり聞くの？

女1 台本のね。

女2 童話ものなの？

女1 ううん。そんなものではないけど、やっぱり日常的な会話だけだと退屈じゃない？

女2 そうなの？わたしは劇のこととかよくわかんないけど。

女1 「演」劇、ね。

女2 どっちでもいいんじゃない。

間。

女1 結局来なかったね。

女2 ー？

女1 その、彼氏？

女2 ……。

女1 まあ、そんなもんよね。

女2 なんか、今日も仕事忙しいってラインで言ってたから、やっぱり明日来るんじゃないかな。

女1 そう。

女2 彼上司とかからめちやくちや期待されてるっぽくって、企画とかいっぱい抱えてて、だからちよつと、予定合わないんだよね。

女1 ーん。

女2 ごめんねー、毎日遅くまで待ってもらってるのに。

女1 私は別に台本書いているからいいんだけど。

女2 あ、そっか。ごめんごめん。

女3、戻ってくる。

女3 ねえ。

女1 まだ起きてたの？

女3 トイレだつて言ったじゃん。

女1 そうだつて。「トイレ」つと。

女3 なんか隣の部屋から怒鳴り声聞こえるんだけど。

女1 え？

女2 壁ドンの方？

女3 うん。なんか、小さ目だけど。

女1と女2、壁の方へ歩み寄り、聞き耳をたてる。

女1 聞こえる？

女2 ううん。あ、でもなんか話し声は聞こえる。

女3 あんなマシンガントクされてちゃ寝れない。

女1 あんた耳はいいのね。

女3 あー、最悪。

女2 文句言う？

女1 注意された側が注意するとややこしいでしょ。

女2 (笑) 確かにね。

隣の部屋の住人から壁を殴られる。

「ドンドン！」

一瞬の間。

女2 びっくりした。こつちが聞き耳たててるのばれてんじゃない？

女1 そんなわけないでしょ。

女3 あれ多分DVだよ。

女1 へ？

女3 多分だけど。

女2 現場見たことあんの？

女3 このあいだちらつとだけ女の人見たけど、二の腕とかに凄い痣あったもん。

女1 へー。こんな近場にいるんだ。

女2 え、それってやばいんじゃないの。なんか、警察とかに電話した方がいいんじゃない？

間。

女1 いいんじゃない？めんどくさいし。

女2 え？

女1 いろいろ事情聴取とかもされるかもだし、もし向こうの家が完璧にDVの事実隠せたらこつちが犯罪者にされかねないし。

女2 そうなの？

女1 そうだよ。意外にそういうことよくあるんだから。面倒なことにはかかわらないの。

女2 でも、男が女に暴力振るってるんでしょ？助けないと。

女1 まあまあ。そういうプレイって可能性もあるからね。世の中は案外、SとMによってバランスが保たれてるから。嗚呼、性癖の北極と南極。温暖化が進むわけだ。

女2 何？

女1 花子、私の耳栓貸したげようか？

女3 ……いい。

女1 でもちゃんと眠れなかったら授業中寝るわよ。なんのために授業料払われていると思ってるの。ほら。

女1、女3に耳栓を渡す。

女3 ……寝る。

女3、再び消える。

女2 助けないの？

女1 何が？

女2 隣の。

女1 どうして？

女2 だって、

女1 だから言ってるじゃん。ヒロインたちは本当に幸せだったのかって。

女2 それは劇の話でしょう？

女1 あんたの彼氏、多分来ないわよ。

間。

女2 そんなことない！約束してくれたもん！

女1 奥さんと子供がいる男が、わざわざ三十前の女なんか迎えにくるわけないじゃん。

女2 そんなことわかんないでしょ！

女1 あんたが一番わかってるくせに。それが幸せとは限らないって。

女2 何？

女1 すると再び隣の部屋の住人から壁を殴られる。「ドンドン！」

隣の部屋の住人から壁を殴られる。

「ドンドン！」

女1 その音はまるで、何かに守られたところから出してくれと叫ぶ赤子のようなものでした。

女2 え、ちょっと、何？

女1 でも、出ることが幸せなのかな。

隣の部屋の住人から壁を殴られる。

「ドンドン！」「ドンドン！」

「ドンドン！」「ドンドン！」

女1 っっていう話。

女1 は作業を止め背伸びをする。

女1 あー、こっから先が書けないのよね。

女2 私は劇とは違うわよ。

女1 大体悲劇のヒロインってそういうこと言うのよね。

女2 勝手に決めつけないで！お姉ちゃんみたいに人生を悲観してない、花子みたいに怠惰的でもない、私は純粋な人生を歩みたいの！そうやって干渉（鑑賞）して、邪魔しないでよ！

女1 どっちでもないだけが。

チャイムが鳴る。

「ピンポーン。」

女1 え？こんな時間に誰？

女2 彼だわ！！

女2 は足早に玄関へと向かう。

女1 ……。

女1、先ほどまで書いた部分を消すかどうか躊躇い、再び書き進める。

女1 女2は、そして足早に玄関へと向かい、彼氏を向かい入れるのでした。

女2、玄関より戻ってくる。その後ろに男がついてくる。

女2 お姉ちゃん。

女1 はい？

男 夜分遅くに失礼します。六一六号室の大島宙美さんですね。お隣から苦情が来たのでご注意に上がりました。

間。

女1 は？

男 管理人の金成です。

女1 これあんたの彼氏？

女2 違う。

男 あの失礼ですがこんな夜中に大きな声で喧嘩を為さるような行為は、ご遠慮いただいております。なにとぞ、トーンを落としてお芝居のセリフなどは発していただけるようお願いいたします。

女1 は？

男 あとですね、お隣からこちらに大島宙美さま以外にお住まいになっている方がいらつしやると聞きました。

女1 え？

男 そちらの方の違約金などもいただかなくてはなりません。どのような事情があれど、契約上こちらにはお一人でのお住みとなっておりますので、ご了承のほどよろしく願います。また、契約上一週間以上の滞在は基本的に違約金をいただくことになっております。うちはホテルではありませんので、ご了承ください。ご理解いただけない場合は強制退去も検討しております。住宅として契約させていただいております当六一六号室はですね、日当たりの良い角部屋ということで、出て行かれましたもすぐに次に申請したいという方もおられるでしょう。くれぐれも、ご理解とご了承のほどよろしく願います。

女1 大家さん、

男 管理人です。

女1 急にそんなこと言われても困ります。

男 こちらとしても、困ります。すべての方、すべての住居でありますゆえ。

女1 ちよつとの間なんですよ、それこそ、幕間程度の、

男 何をおっしゃっているのか。そちらの女性、真ん中の妹さんはまあそのちよつとの間に適応したとして、下の妹さんに関しては長期滞在のご予定、また現在進行形ですよね。認められませんか。

女1 なんで真宙が真ん中の妹だってわかるんですか、

男 すべてお隣の方からの苦情でございます。ご了承ください。さあどうなさいますか。今違約金を払われるか、強制退去させられるか。

女2 お姉ちゃん、

女1 お金なんてありません！

男 では、強制退去ということでしょうか。

女2 私、お腹に赤ちゃんがいるんです！

間。

女2 だから、強制退去とか、そんなものはナシにしてください。

女1 真宙？

女2 ごめん、実は、

女1 例の男の、子？

女2 ・・・うん。

女1 なんて黙ってたの！

女2 なかなか言い出せなくて。

女1 堕ろしなさい。

女2 いや、

女1 堕ろしなさい！

女2 いや！・・・どうしても産みたいの・・・。三十過ぎて都合のいい女にされてるってわかってる。だってそういう風に演じてるんだもん。でも、それでもあの人のこと好きなの・・・。

女1 真宙お・・・。あんたって子は・・・。

女2 一人で育てていく。お姉ちゃんの手は煩わせない。だから、だから、産ませて・・・。

女1 ・・・うん。わかった。わかったから。

女2 お姉ちゃん・・・ありがとう、ありがとうございます。管理人さん、お願いします、ここで、赤ちゃんを育てさせてください。

男 だめです。

女2 鬼かつ！

男 なんですか今の即興コントは。だめです。なおダメです。あなたたちみたいなキチガイクレマーみたいな姉妹、住まわせるわけにはいきません。

女1 なんでダメなんですか！妹がこんなにお願しているのに！！

男 だから、別にそっちの方は問題ではないって言うてるでしょう。問題は長期滞在進行形の下の妹さんなんです。お隣の報告によると三月から同居されてますよね？もう半年ではないですか。むしろ今まで気づかなかった自分が腹立たしいですよ。

女2 そんなに長くいるの？

女1 まあね。

男 こつちはきちんとした契約書があるんですから。手荒いことはしたくないですから、一刻も早く退去願います。

女2 こんな夜中に、姉と妹を追い出すんですか。人としてどうなんですか。

男 あなたもですよ。

女2 え、

女1 なんで私が出ていくのに自分は残れると思ってるのよ。

男 さあ、早く。

間。

女1 下の妹なんて、居ませんから。

男 ……は？

女1 さつきから何をおっしゃっているのか見当もつきません。下の妹なんていませんよ？

男 何を言っているんですか？

女1 今この場に、私とこの子しかおりません。それがなぜ三姉妹だと思うのですか？歯ブラシもコップも寝間着も、すべてこの真宙が自宅から持ってきたものです。二人分しかありません。どこに下の妹の存在がありますか。

男 ……ごまかすつもりですか。

女1 ごまかすも何も、もともと存在しませんよ？仮に戸籍上もう一人妹がいたとして、ここに一緒に住んでいるとは限らないでしょう？ねえ？

女2 う、うん！

男 では寝室にお邪魔します。

女1 どうして！どうして急に寝室に！

男 多分寝てるんでしょう。

女1 管理人だからって女性のプライベートルームに侵入して良いのですか。素敵な権利ですね。

男 これだから三十過ぎたババアは……。

女1 侮辱罪ですね、今のは立派な侮辱罪です。どうします、裁判しますか？いいんですよ私は別に、裁判になったって。裁判費用は出しませんが。

男 あのねえ、いい加減にしてくれませんか。こつちだって日が変わりそうな時間にこんなことで騒ぎたくないんですよ。

女2 じゃあ、待ってください。せめて、一日だけ。

男 ……はあ？

女2 お願いします。あと一日で彼氏が私を迎えに来るんです。どうか、どうか、

男 そんな人は来ませんって。いつまでその芝居をやってるんですか。

女2 来ますよ、来ますから……。

女2 は泣いている。

男 泣いたって無駄ですよ。

女2 鬼めっ！

男 天井なんてしてる暇はないんです。さあ早く、退去を。
女1 いませんよ、ほかに誰も！

女3 再び現れる。

蠟燭がささったケーキを持っている。

女3 お姉ちゃん、

女1 あ、ほか、

女3 ハッピーバースデートウユー。ハッピーバースデートウユー。お姉ちゃん、誕生日おめでとう。

女1 え、あ・・・もう日付変わってる。

女3 お姉ちゃん、いつも迷惑ばかりかけてごめんね。いつも怒らせてばかりだし、私も怒ってばかりだけど、今日だけはやっぱり素直に言うね。いつもありがとう。三十四歳の誕生日おめでとう。

女1 ……私三十三だけど。

間。

女3 さ、吹いて。

女1、蠟燭の火を吹き消す。

女3 おめでどう！

女2 お、おめでどう！

女1 ……ありがとう。うれしい。いつも自分の劇団のことばかりできちんとあなたに向き合えてないダメな姉だけど、ごめんね。ありがとう。

女3 ううん、私も。ごめんね。ありがとう。

女1 花子……。

男 感動的などころ悪いんですけど、早く出て行ってくれませんかね。

女3 わ、この人だれ。

女1 気にしないでいいわ。モブキャラよ。

男 いるじゃないですか、妹。しっかり。

女1 うるさいわね、だからどうだって言うのよ。

男 逆切れですか。

女1 今私たちの見せ場なんで、出て行ってもらえませんかね。

女3 ねえ、変態？

女1 そうよ。

男 だから、さっきの話に戻りますと、妹さんがこうして実際に存在している以上、もう退去してもらおうか違約金を払ってもらおうかのどちらかなんですよ。パワーバランス的に、僕の方が上なんです。お金は払えない出て行かないだともうこの話が終わらないですよ。だから早く出てけよ！

女2、苦しみだす。が、周りは気づかない。

隣の部屋の住人から壁を殴られる。

「ドンドン！」

女2 あ、ぐ、

男 ほら、また苦情だよ。もううんざりなんだよ！

女1 ついに本性を出したわね。男なんてみんなそう、都合が悪いとすぐそうやって大声出して。

男 我慢したぞ、ここへ来てからしばらく、永遠にも思える長い時間我慢しただろ。それをなんだ簡単にカテゴライズしやがって、

女3 ねえあの変態何言ってるの？

男 そしてその誤解を解け！

女1 私は妹たちを守るためにいるんです。

隣の部屋の住人から壁を殴られる。

「ドンドン！」

女3 ねえ、あの人だれなの？お姉ちゃんの彼氏？

女1 花子は気にしなくていいのよ。あなたは何も気にせず、絵を描けばいいの。

女3 絵を？

隣の部屋の住人から壁を殴られる。

「ドンドン！」それはずっと続く。

女1 だから私たちにはもう構わないで！

男 こっちだって責任がありますからね。

女1 大事な時に責任を取らないのが男でしょ。

男 どんな偏見だよ。

女2 う、産まれ、

女3 絵を、描く。

男 ごちやごちや言ってるで出でてくれよ。頼むよ。

女2 産まれそう、今、

男 出ろって言うてるだろ！

女1 あんたが出ていきなさいよ！

女3 描く。

女2 う、産まれる！

隣の部屋の住人から壁を殴られる。

「ドンドン！」

それによって、壁は崩壊する。隣の部屋と繋がる。

音楽 Skeeter Davis 「The end of the world」

女3 あ、凄い。

女1 気持ち悪い、近づかないで。

女3 燃えてる？火事？

男 俺だっておまえらが気持ち悪いよ！

女2 ねえ、産まれた？産まれたの？これ産まれた？

部屋はいっぱいの煙に包まれる。始まりの空間に少し似てくる。

女3 火の付いたロウソク！隣の部屋にいっぱいロウソク！

女2 ああ、産まれたみたい。

女1 もうわけわかんない！

男 いたちごっこだよ。馬鹿みたいに虚構ばかりぼやいて、

女1 どっか行ってよ、私たちの邪魔をしないで。

男と女1はずっと喧嘩をしている。女3はゆっくりと黒い絵の具で白いキャンバスを染める。

女2は、産まれてもいない我が子をあやす。そのままゆっくりと、舞台は終わる。

暗転。

明かりがつくと、舞台は真っ黒。ほかには何も無い。

女3 果てしなく長い長い時間、女つてのはいつも愛を待ち望んでいる。待ち望んでいるの。まるで夜空に輝く星のように、いつか誰かが上を向いて見つけてくれるそのときみたいに。そして私たちはそのときの一瞬に今までで一番の輝きをかけるの。素敵でしょう。ここは宇宙の果ての果ての果て。つまりどこでもない場所。ここでは限りなく無限に近い時間が流れているわ。まるで夢、夢を見ているみたいなの、そんな時間。私たちはその夢の時間の中で、現実という夢を見ている。何にも染まらない色で、いえ色ですらない存在として、ここで愛を待っている。私たちはキャンバスだわ。ただひたすら、部屋の隅で待つキャンバスに似ているの。でも、誰も絵具を持っていないから、私たちは無限に、無限にここで生きている。今日も明日も、いえ、そんな時間の概念なんてない空間で、ただひたすらに、私たちは待っているの。まるで幕間のように、次への準備をしているの。何もない空間で、ただひたすらに、ええ、このセリフも次へのセリフです。何事も全部。ただ、ゆっくりと、舞台と舞台の間で、こうして。次は私のセリフでしょうか。いいえ、次は・・・。

暗転。

【上演に関して】

- ※ 上演を希望される場合はその旨を「プロトテアトル」までご連絡ください。
- ※ 台詞の変更・追加・削除などは基本的に自由に行っていただいても構いません。
- ※ 稽古場やワークショップでの使用はご連絡不要です。（でもご一報いただけると喜びます…。）

【連絡先】

プロトテアトル

e-mail: prototheater@gmail.com